

# 國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

学内研究会「島嶼部の伝統芸能をめぐる諸問題：  
三宅島にみたこれまでの活動とこれからの展望」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2025-04-09 キーワード: 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002001542">https://doi.org/10.57529/0002001542</a>

## 学内研究会「島嶼部の伝統芸能をめぐる諸問題 ～三宅島にみたこれまでの活動とこれからの展望～」

日本文化研究所では、2023年2月27日（月）に学内研究会「島嶼部の伝統芸能をめぐる諸問題～三宅島にみたこれまでの活動とこれからの展望～」を開催した。三宅島で伝統芸能の調査・研究や啓蒙活動にあたる柳原（壬生）友子氏の発表後、伝統芸能の研究者である橋本裕之氏によるコメントがあり、最後に会場全体での質疑応答を行った。開催概要を以下に示す。

### ■開催概要

【日時】2023年2月27日（月）13：30～16：30

【開催方式】対面（於、AMC 5階 06会議室）

【発表者】柳原（壬生）友子

【コメントーター】橋本裕之（坐摩神社権禰宜／大阪公立大学都市科学・防災研究センター特別研究員）

【司会】川嶋麗華（本学研究開発推進機構助教）

### ■研究発表

柳原氏による発表「島の内からの目・外からの目—三宅に暮らす知恵としての信仰を伝えてゆきたい—」は、I. “島のひとの目”をもちたい、II. 信仰の中に暮らしがのこる 暮らしの中に信仰がのこる、III. 現在の三宅島で、継承を考える、IV. ぜひ三宅へ！「三宅島役所跡」へ！！の4部からなり、柳原氏の三宅島での活動事例が、スライドの写真を織り交ぜながら発表された。

柳原氏は、高校時代に伊豆諸島を訪れて以来、島の魅力に惹かれ、往来を続けてきた。現在は三宅島の神職を代々つとめる壬生家に嫁ぎ、島外の目を持つ島内の人として、三宅島の魅力を発信する活動を行っている。

壬生家が神職をつとめる島内の各神社では、東京都指定の無形民俗文化財である「御笏神社の神事」といった民俗芸能を含む様々な行事が伝承される。年始めには「御祭神社の神事」

に先立つ行事として「御太刀様」の「島めぐり」がある。隔年8月に神輿が島を巡る「富賀神社の巡り御輿」では、壬生家が神事を執り行うだけでなく、島内の地区を巡る中で、各地区に伝承される芸能が奉納される。ほかにも7月の牛頭天王祭や、2月の初午などの行事が伝承される。柳原氏は数多の神事・祭礼を紹介したうえで、「自然・暮らし・信仰が相互に近い」という三宅島の特徴を述べ、伝統芸能を含む諸行事を継承することの重要性を主張した。

継承にあたっての課題として、柳原氏は、交通の便／噴火と避難・人口減少／異動人口／医療機関／自然の特徴／学校・教育文化観光施設や機関／職業／副業としての農漁業という8つの基本課題を挙げた。これらの課題を把握したうえで、島の特徴を知り、誇りを持ちつつ、自然科学・人文科学の学際的視点から文化の記録と説明を行うべき、と述べた。さらに具体的な活動事例として、神事・芸能の稽古や神社の掃除活動、茅葺き屋根の三宅島役所跡の保存活動、小中学校の郷土理解学習へ参加、民俗の聞き取りや技の継承、HPやブログ、SNSによる記録と発信の活動、の5つを挙げて説明した。

最後に柳原氏は、島での暮らしに寄り添い、馴染む形を模索しつつ、知恵を伝える「内からの目」と、文化的な特異性・重要性を学んで地域活性や誇りに繋げる「外からの目」の両視点をもち、三宅島の文化を継承するという抱負を述べた。当面の目標として、東京都指定史跡「三宅島役所」を拠点とし、島内外の人物との交流を深めることを挙げ、本発表を終了した。

参加者が三宅島の文化継承を考える有意義な研究会となった。（武井謙悟）